

ひらり、ふわり。

大正・昭和の機械と培った技術が紡ぐ世界進出



長野市の高澤織物では、昭和8年製の整経機(写真左上)をはじめとする伝統の機械の特性を生かし、世界から高く評価されるテキスタイルを織り上げています

伝統と最先端ファッションをつなぐ「織」

長野市篠ノ井は、明治時代、鉄道駅の設置に伴い、北信濃一帯の繭の集積場が置かれ、独自の繁栄を遂げました。1924(大正13)年、この地に創業したのが高澤織物です。

伝統あるこの絹織物工場が、今、アパレルの世界から熱いまなざしを注がれています。そのきっかけとなったのが、2000年秋、フランスからかかってきた1本の電話でした。同社の工場で長く着物地の生産に使われてきた糸繰り機、撚糸機、整経機、織機などを駆使して織り上げた布が、東京の展示会で、あるラグジュアリーブランドの目にとまったのです。

それは、これ以上ないほど繊細なシルクとカシミアの糸を使って織り上げた、軽やかで、とろけるような肌触りの服地でした。シンプルなモーターを動力とする伝統的な機械で、ゆっくりと織る工程では、糸にも生地にも必要以上のテンションがかからないため、ごく細番手の糸も使うことができます。反物の生産で培ってきた技術とノウハウを生かし、あえて伝統の工程を大事にすることで、同社は、驚きの軽さ、柔らかさ、しなやかさを持つ布の生産を実現しました。随所に経験を積んだ人の手わざが加えられるため、できあがる製品には、他にはない絶妙な風合いも宿ります。ブランドの担当者は、この布に惚れ込み、翌年のコレクションの1着用に白羽の矢を立てたのです。実は2000年代以降、シャネル、エルメス、ルイヴィトンなど世界的ファッションブランドの多くが、日本で作られるテキスタイル(織物・布)を高く評価するようになっていきます。着物文化を基盤に培われてきた日本の染織の伝統に加え、製品づくりに携わる職人た

ちの妥協のない取り組みによって生み出される製品の完成度の高さが、国境を越えたパートナーとして絶大な信頼を得るに至っているのです。

着物からアパレルへ、事業の転換を図り、模索を続けていた高澤織物にとって、これは思いがけない挑戦の機会となりました。ラグジュアリーブランドのオファーへの対応は「白刃の上を素足で2、3km全力疾走させられる緊張感」と、高澤史納(ふなのり)さんは当時を振り返りますが、それこそが、ものづくりへの思いを強く刺激したといいます。ほかのどこにもないものを生み出す喜びは、工場全体の新たな活気にもつながりました。

昔の機械を現役で使うのは、操作やメンテナンスに技術を要し、取り替えがきかないといったリスクも伴います。しかし、その特性を生かすことで創造される美と風合いは、現代のマシンでは再現することができません。同社の工場では、今もその機械たちが元気な音を響かせ、国内外の有名ブランドをはじめ、百貨店やセレクトショップ等のニーズに応え、信州発のテキスタイルを織り続けています。人と機械が一体となることで紡ぎだされる高澤織物の製品には、創業から長い年月をかけて継承されてきた技術と、作り手の熱い想いが込められています。



世界で最も細い絹糸、毛糸、綿糸を自在に操る機、技術、人

お話をうかがった高澤史納さんは、高澤織物株式会社専務取締役。信州紬の伝統工芸士であると同時にテキスタイルデザイナーとして世界を舞台に活躍しています。最上級の縮緬生地を織る工房を創業し、伝統ある絹織物産地、滋賀県長浜からの発注に応じた祖父、紬の研究と独自の絹織物開発に情熱を傾けた父の薫陶を受け、繊維系の大学で有機化学を学び、西陣織のトップメーカーに就職。研究開発、営業の仕事を経て家業に入ります。

伝統の織物文化から化学、流通まで繊維を多角的に知る高澤さんが1990年代、生き残りのために決断したのが、アパレルの世界に踏み出すことでした。長く受け継いできた糸繰り機や織機と、高澤さん自身の技術、感性、そして、ぬくもりに満ちた美しい布地を生み出すことに喜びを見出し、熱心に取り組むスタッフの皆さんの手わざが、日本にここだけの織物工場として同社が存続し続ける力となっています。

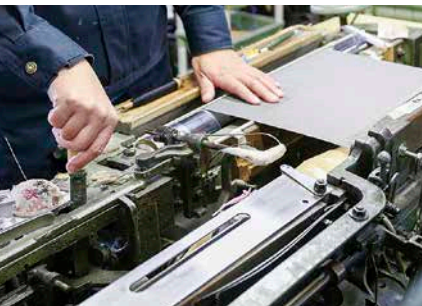
よい糸ほどよい色に染まる

展示会などで人気を集める定番のストールは、驚くほど軽いシルクカシミア素材のとろけるような肌割りと、鮮やかな発色が魅力です。このしなやかさは、常識を超える細い糸で織るため。また、デザイナーの期待を裏切らない発色が実現するのは、糸の質が極上だからこそ。この品質を変わることなく保持できるのも、伝統の機械たちと手わざの力ゆえなのです。海外の美術館のミュージアムショップや、国内の一流百貨店でも、十数年にわたり愛され続けています。



手仕事のぬくもりが製品に

工場内に並ぶ織機の一機一台は、異なる繊維、異なる糸がかかり、同時にいくつもの商品を生み出しています。百貨店から受注したシルクやシルクカシミアのストール、アパレルブランドに納品するカシミアの服地、セレクトショップに納めるシルクや綿のマフラー、そして上田紬の着物の反物など、色も風合いも実に多彩です。その一つ一つに手仕事が生息しています。糸の撚りの加減の調節、織り途中の目の飛びの補正、ストールなどの房の手づくり、糊がけ、アイロンまで人の手で行うのです。ていねいな仕事にこめた思いが、製品のぬくもりとなって使い手の心に届きます。



ストレスフリーの糸で織る ストレスフリーの布地

工場内で目を引くのは、時代の重みを感じさせる糸繰り機や撚糸機、整経機、織機。見た目もアナログな印象の、しかし、だからこそ独特な風格と美しさを漂わせる機械たちです。かつて人の手足で行っていた作業をモーターに変えただけの機械のため、操作も、制御も、人が行います。そのうえ処理の速度や量も、現代の全自動制御のマシンとは比べものになりません。

「いわば蒸気機関車です」と、高澤さん。「新幹線のような効率は望めませんが、その分、糸に必要な以上のテンションがかからないのです」。ストレスフリーの糸で織り上げるストレスフリーの布地たち。「世界一繊細」と、アパレル界で評される布の秘密が、ここにあります。

東北コットンプロジェクトに参加

2011年3月11日の東日本大震災で津波被害に遭った東北の農地に、塩害に強いコットンを植え、農業を再開してもらうことを目的とした支援活動「東北コットンプロジェクト」に参加し、「東北コットンストール」の生産に取り組んでいます。人の髪の毛より細い綿糸を使って織り上げ、コットンと聞いて驚くほどしなやかな手触りと、やさしい光沢のストールを生み出しました。高澤織物の工場敷地では、東北コットンと同じ種類の綿を栽培。花が咲いたり結実したりする様子は、地域の子どものための社会見学の見学教材にもなっています。



大正十三年創業
高澤織物

取材協力：
高澤織物株式会社
〒388-8004 長野県長野市篠ノ井会223
TEL 026-292-0436
<http://takasawa-orimono.jp/>

※高澤織物の商品と出会うには、都内の有名百貨店（東急百貨店東横店南館7Fに常設、三越日本橋本店ほか）などで。長野県内では戸倉上山田温泉笹屋ホテルのショップにあります。

フッ素系廃液を原料とした高純度フッ化カルシウム製造

ミヤマ上越工場ではフッ素系廃液を原料とした、高純度のフッ化カルシウム(CaF₂)製造を行っています。従来からあるフッ素系廃液のリサイクルとは異なり、硝酸・酢酸、アンモニア等の高濃度混酸廃液からも抽出・製造が可能です。製造したフッ化カルシウムは85%以上の純度を実現し、各種工業原料として使用されています。

フッ素系の高濃度混酸廃液リサイクルでお困りのお客様は、ミヤマまでご相談ください。

【対象業種】

半導体製造業、ガラス製造業、表面処理業など

【対象廃液】

エッチング液、剥離液など表面処理工程より排出される硝酸、酢酸、アンモニア等を含む混酸廃液など

【製造したフッ化カルシウムの利用例】

フッ酸原料、鉄鋼精錬におけるフラックス等



水質汚濁防止法改正 トリクロロエチレンに関する 排水基準値が強化されました

「水質汚濁防止法施行規則等の一部を改正する省令」が平成27年10月21日より施行され、トリクロロエチレンの排水基準値等が強化されています。なお、改正後の排水基準は法律施行期日以後に特定事業場となる事業場には直ちに適用されますが、既設の特定事業（設置の工事をしていないものを含む）については改正後から6か月間（平成28年4月20日まで）、水質汚濁防止法施行令別表第3に掲げる施設を設置している特定事業場については1年間（平成28年10月20日まで）は適用されず、従前の排水基準が適用されます。

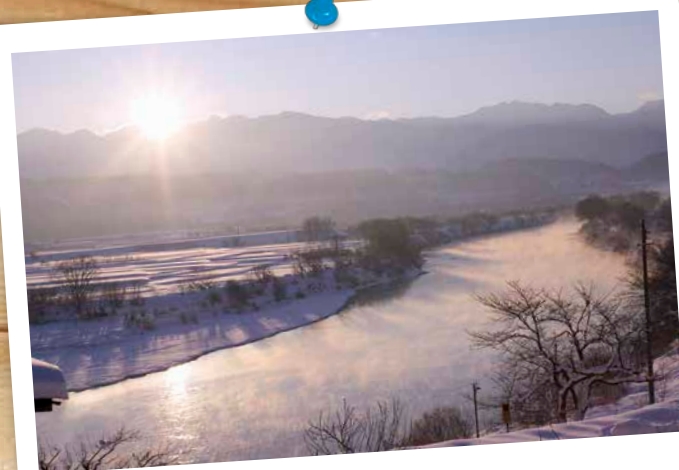
改正内容

排水基準値

改正前 0.3mg/L ▶ 改正後 0.1mg/L

地下水の浄化措置命令に関する浄化基準

改正前 0.03mg/L ▶ 改正後 0.01mg/L



2015 December - 2016 January